立命館地理学　第17号（2005）129～139

大学と旧制高校の立地で考える近代京都の地理

――私立4大学と三高・帝大――

河　島　一　仁*

Ⅰ．はじめに

近代以降における京都の地理に関して、大学を糸口に整理することを小稿は目的としている。自明のことながら、大学は空間を要し、相応の面積を有する敷地に定置される。新しい制度でうみだされた大学が、どのように敷地を獲得していったのか。このことはそれぞれの大学の沿革が語られる際に、当然のこととして言及されてきているはずである。したがって、本稿で用いる諸事実には新しいものはなく、記憶として共有されているものばかりである。

Ⅱでは、私立の4大学について整理し、Ⅲでは第三高等学校と京都帝大について見ていくことにする。ただし、紙幅の都合上、Ⅱでは地図を全く示していないこと、引用箇所以外では現行の地名を用いていることなどを予めお断りしておく。

Ⅱ．私立4大学の立地

1．本山寺院と大学

1998年に設立された「財団法人　大学コンソーシアム京都」には国公私立の4年制大学と短期大学の50校が加盟している。そのすべてが京都市内に位置しているわけではないものの、このような団体が組織されていること自体が、京都が世界歴史遺産や観光にとどまらず学術に関しても日本有数の都市であることを端的に示している。加盟している大学のうちで、大学としての設立年が最古なのは1897（明治30）年の京都大学（京都帝国大学）である。大学令によって、私立では1920（大正9）年に同志社大学、1922（大正11）年に龍谷大学、大谷大学、そして立命館大学がそれぞれ発足した[1)]。これらはいずれも京都市内に位置している。

4つの私学は、大学令が発令される前にそれぞれの歴史をすでに有している。浄土真宗本願寺派と大谷派がそれぞれ設立した龍谷大学と大谷大学は、ともに17世紀に創設された、それぞれの宗派の「学寮」を起源としている。

龍谷大学のもとの名称は「仏教大学」であったが、大学に昇格する1922年に名が改められた[2)]。龍谷大学大宮学舎は、京都市下京区御器屋町と大工町に位置している。1868（慶応4）年の「改正　京町御絵図細見大成」[3)]でその箇所をみると、「下間」と記載され、北隣に「本願寺御門跡」があり、東隣には「興正寺御門跡」が位置している。「下間」の地理的実態に関して判然とはしないが、そこに1879（明治12）年に大教校が竣

＊立命館大学文学部

工した[4]。1936 年に落成した同大学の大宮図書館[5]の敷地は、上述した 1868 年の絵図では「本願寺御門跡」の中に含まれていた。このことは、西本願寺と龍谷大学が一体のものであることを端的に示している。

大学令で「大学」に昇格する前、大谷大学の名称は「真宗大谷大学」であった[6]。それは東京にあった真宗大学と京都の高倉大学寮が 1911（明治 44）年に合併してできたものである。真宗大谷大学は、高倉通魚棚上ル富屋町に位置していた高倉大学寮の敷地で開校した[7]。その 2 年後に、京都市北区小山の現在地に移転し、そこで 1922 年に「大谷大学」に改称したのである。1915（大正 4）年の「京都近傍図」[8]を見ると、「琵琶湖疎水支流」の北側に同大学は位置している。「琵琶湖疎水支流」と京都市街地との間にも水田があることからも明らかなように、真宗大谷大学は当時における市街地の外に立地したわけである。

龍谷大学が、京都市街地の外に位置する伏見区深草に新たな拠点を設けたのは 1960（昭和 35）年のことであった[9]。それは米軍の施設を転用したものであるが[10]、1915 年の「京都近傍図」には「京都兵器支廠」とあり、明治期以降に農地から転用され、「軍都」伏見の一角を占めていた施設であった。

以上のように、名称の変化は別にして、龍谷大学は西本願寺に隣接して、大谷大学は東本願寺から直線距離で約 400 メートルのところで創始された。要するに両大学ともそれぞれの宗派の本山寺院と極めて関わりが強い場所に立地したと解される。

2. 藩屋敷跡と宮家・公家屋敷敷地における大学

同志社英学校は1875年に寺町丸太町上ルで開校され、翌年に薩摩藩屋敷跡に移転した。『同志社百年史』[11]によると、新島襄らは、もと会津藩士山本覚馬が「所有していた旧薩摩屋敷あとの桑畑を校地として譲りうけること」になった。「山本がそれを入手する以前は薩摩屋敷といわれた」と同書には書かれている。この記載によれば、明治維新後に薩摩藩屋敷は取り壊されて、その跡地は桑畑になっていたことになる。

『同志社百年史』[12]には、公家屋敷に関しても記載されている。1873 年に、同志社は J. D. デイヴィスを教師として雇い入れる契約をした。彼のための住居を確保するために新島は奔走し、「御苑の中の華族柳原前光の広大な屋敷（上京区第 11 区清和院門内中筋通 683 番地）を借りること」ができた。「禁闕内外全図」[13]（1837）を見ると、禁裏御所の東側に柳原家の屋敷位置を確認することができる。「柳原は東京遷都で天皇に従って東京に移っており、その広い旧宅があきやであった」ので、キリスト教に厳しい社会的状況でもアメリカ人が住めたのである。

1876 年に来日した A. スタークウエザーが居住し、女子教育を始めたのも「京都御苑内の旧柳原前光邸」であった[14]。おそらくこのころには、外国人が居住し教育活動をできるほどに、禁裏御所周辺は空洞化していたのであろう。その後、女学校は、1878（明治 11）年に上京区常盤井殿町に移転した[15]。そこが、現在の同志社女子中・高校である。「禁闕内外全図」（1837）を見ると、そこに「二条殿御家領」と記されている。今出川通沿いにそれと西接する「伏見宮御屋舗」に、現在では同志社女子大学が位置している。さらにその西には、「冷泉トノヤシキ地」、「山科殿」、

「冷泉殿」、「藤谷殿」、「徳大寺殿」、「竹内殿」と並び、烏丸通となる。これらのうちで現存しているのは冷泉家だけで、あとの公家屋敷は同志社大学の敷地となっている[16]。これらの公家は前掲の柳原家と同様に東京に転居したものかと思われるが、それに関する資料を筆者はまだ入手できていない。

以上のように、同志社は薩摩藩屋敷跡の再開発で英学校を建て、その後には宮家や公家の土地を吸収しながら校地を拡大していったのである。京都でもっとも早い 1920 年に旧制の大学となった同志社大学は、明治維新以後における禁裏御所近傍の土地所有と土地利用の変動のなかで発展していったと解することが許されよう。

3. 寺および御旅所跡地における大学

1900（明治 33）年に中川小十郎は、上京区中之町で東三本柳通に面していた元料亭「清輝楼」を仮校舎として、勤労青年のための夜学「京都法政学校」を創立した。『立命館創立五十年史』[17] によると、それは 3 階建てで、校舎として利用されたのは、「二階と三階の一室だけで、畳数は六十六畳敷の一間と八畳間が二階にあり、三階は八畳敷間一つ」であった。講義を担当したのは、京都帝大の教授ばかりであった。発足時には「立命館」の名称ではなかった。「「立命館」の名称は公式には大正二年からのものであるが、京都法政学校そのものが、西園寺公のたてた家塾「立命館」の精神をそこにうけ継ぎ、明治三十九年にはすでにその名称を継ぐことを許されている。」と同書には書かれている。

『立命館百年史』[18] によると、中之町に仮校舎を設けたのは「講師を依存する関係から、京都帝国大学の近くでなければならなかった」からである。それに加えて、勤労学生を対象としているため、勤務先からの通学時間を考慮すると市街地の内部に適地を求めねばならなかったはずである。仮校舎が手狭になって新たに校舎を求める際にも、『立命館百年史』が叙述しているように京都帝国大学との距離を勘案し、筆者が指摘したように勤労学生の通学時間も顧慮されたのではないだろうか。

その後、「現在の敷地の一部である上御霊神社御旅所跡、京都市上京区広小路通リ寺町東入ル中御霊町四一〇番地の六六七坪が買い入れられ」[19]、ここへ建てられた校舎への移転が完了したのは「明治三十四年もまさに終ろうとする十二月の三十日」であった。ここにある「現在」とは、1953 年頃のことである。

『立命館百年史』[20] によると、上京区土手町通丸太町下ル駒之町での敷地が最初の候補となったものの、それがかなわず中御霊町 410 番地に移転したのであった。なぜ「御旅所跡」が選択されたのかに関して、『立命館創立五十年史』と『立命館百年史』の双方とも言及していない。

1978 年に衣笠学舎への一拠点化が完成する直前の広小路学舎のうちで、南を広小路、東を河原町通といくつかの店舗、西を寺町通、そして北を廬山寺で画された範囲についてみると、そのほぼ南半部が中御霊町、ほぼ北半部が北之辺町の南端部からなっていた。「新改　内裏絵図」[21]（1677（延宝 5）年）では、その範囲の北半部に「遣迎院」、南半部に「中御霊」と記載されている。いずれも寺町通に門が描かれ、双方の敷地界には明瞭な線が引かれている。そしてこの絵図の「中御霊」南縁には「町家」が連なっていた。

「慶応改正　内裏御絵図」[22]（1868（慶応4）年）の場合、その範囲はほぼ三等分され、北から順に「遣迎院」、「中御霊」と書かれ、その下の区画には文字が記載されていない。色についてみると、遣迎院には緑色がつけられているが、中御霊と文字のない区画には同じ赤い色がついている。したがってそこは中御霊とは区別されるものの、相互に関わりがあり、文字注記を必要とされない区画であると見なされていたと解される。断定はできないものの、おそらくここには 1677 年の絵図にあったように、町家が位置していたのではないだろうか。なお「中御霊」という文字に続けて鳥居が記号的に描かれている。「新改内裏図」[23]（1791（寛政3）年）では、そこは「中御霊社」と記載されていることを見ても、「中御霊」とは神社もしくはそれに順ずるような施設であったことは間違いない。『立命館創立五十年史』には既述のように「上御霊神社御旅所」と書かれていたが、中御霊の詳細に関して筆者の調査は及んでいない。

以上のように不明な点を残してはいるが、1901 年に移転を完了した場所には「中御霊社」とおそらく町家が位置していた。それらを撤去させて、京都法政学校がそこに移ったのか、あるいは「中御霊社」と町家が何らかの理由ですでに消滅していたのかについてはわからない。『立命館創立五十年史』の叙述にしたがえば、中御霊と町家の部分を先に入手し、時間差をおいて遣迎院の敷地も購入したのであろう。ただしこの場合も、遣迎院という寺を撤去させたのか、あるいはその寺がなくなってから購入したのか、判断できる資料を筆者はいまだに入手できていない。

そのいずれにしても、1901 年頃には、禁裏御所にも仙洞御所にもほど近いこの場所で、1677 年から 1868 年までの絵図に記載された寺と御旅所が消滅したのであった。史料的には不充分で確言はできないものの、禁裏御所周辺の公家町・寺社などの土地所有と土地利用の変動が、明治の初頭から 1901 年ころまで継続していたのではないだろうか。京都法政学校すなわち立命館は、そのような変動の過程で、自らの根拠地を確保したように推察される。

もっとも早い時期に旧制大学となった同志社大学、それに続いた龍谷大学、大谷大学、立命館大学の立地に関して検討を行った。近代が産み出した私立大学は当然のことながら地表面のどこかに敷地を確保してできあがった。高層化が進む現代の都市であれば、ビルのフロアを利用することも可能であろう。しかし、明治期の新しい学校は、地面に定置されなければならなかった。真宗大谷大学を唯一の例外として、他の 3 大学は京都における既存の市街地にその場所を見出した。龍谷大学は、西本願寺南隣の「下間」で、同志社と立命館は禁裏御所の近傍に出現した空間に誕生したのであった。

Ⅲ. 「鴨東」地域における第三高等学校と京都帝国大学

私学とは異なり、国立の教育機関は恵まれた資金をもとに広大な敷地に形成されることが多い。1889（明治 22）年に大阪から吉田町に移転した第三高等中学校、1897（明治 30）年に勅令第 209 号[24] で、「京都市上京区吉田町」に創設された京都帝国大学もその例に含まれる。

本章では、第三高等中学校（後に第三高等学校）で4年間学んだ喜田貞吉の随筆と地図を資料として用いる。『岩波日本史辞典』[25]によると、喜田は1871（明治4）年に徳島県で生まれ、東大を卒業して文部省に入り、1920年から1924年まで京大教授を勤めた。

1928（昭和 3）年に刊行された『京ところどころ』[26]（1928）には下記の文章が収録されている。なお、本文中の下線は筆者による。

学校街

学校街の「草分け」は三高
学校街風呂銭僅五厘＝「京に田舎あり」は実際
鴨東の開花は平安奠都が動機
文学博士　　喜田　貞吉

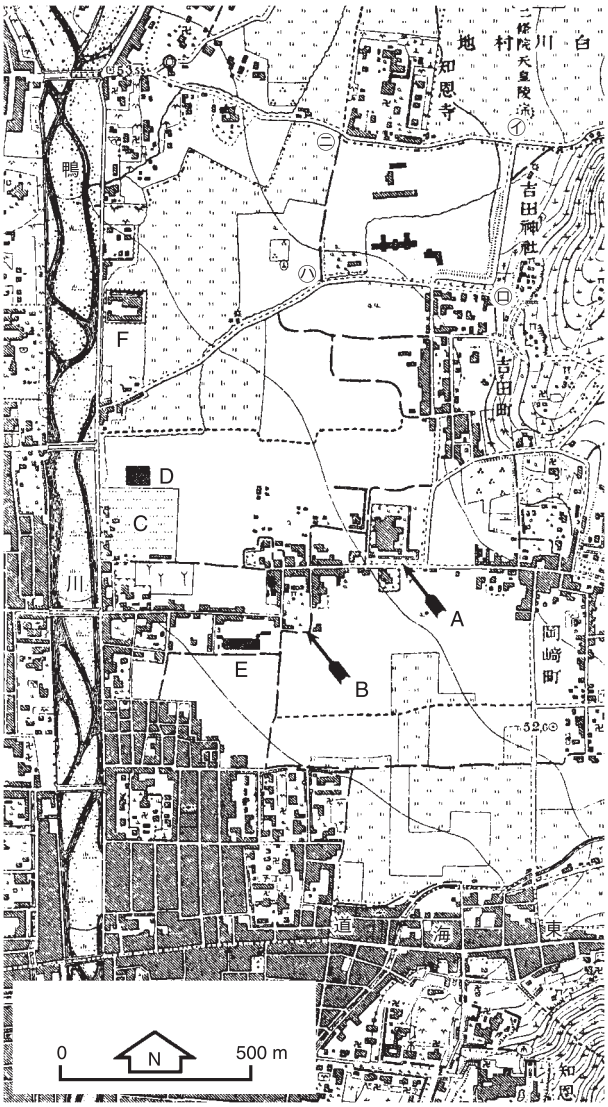
①吉田を中心として、南は聖護院、北は田中百万遍のあたり、正に京都市内の学校街というふべきところであらう。帝大を筆頭に、三高、一中、高等工芸から、私立の中学校、女学校、予備学校の類までだんだんこのあたりに集まって来る。学生相手の間貸や、食堂、下宿屋、文房具、雑貨店などが繁昌する。あまりに詰まり過ぎたので、先き頃市立の美術学校、絵画専門学校は今熊野へ逃げ出し、近い将来に府立の一中も、どこかへ引越さうではあるが、その代りに帝大は益々幅を利かして来ようし、このあたりが学校街として繁昌することは将来として動きがあらうとは思われぬ。

これは、昭和3年頃の状況である。北は田中の百万遍あたりから、南は聖護院までが「京都市内の学校街」であると喜田は表現した。京都帝国大学、第三高等学校、京都府立第一中学校などが連接している景観は、まさに「学校街」であろう。数の点でも京都で最多の集中を示し、しかも質的にも優れたエリートが集まる地域であった。しかし、喜田は学校のみを取り上げて「学校街」としたわけではない。間貸、食堂、下宿屋、文房具店、雑貨店などの機能も含めてそう呼んだのである。

②この学校街の「草分け」は、勿論今の三高の前身たる、第三高等中学校である。もと大阪にあったこの学校が、今の帝大の敷地に移ったのは、明治22年の9月であった。当時在学中の自分は、学校と一緒に、引ずられて来た一人だったのだ。

もともと大阪にあった第三高等中学校は、吉田村に移転した。『神陵史』[27]によると、敷地面積は 49,570 坪余りで、煉瓦石造の建物が4棟もあり、そのほかに木造の雨天体操場や寄宿舎も建てられ、明治22年9月1日に京都新校開校式が行われた。それには、文部大臣榎本武揚、京都府知事北垣国道、東西両本願寺法主、同志社長新島襄などが出席した。そして明治27年9月に「第三高等学校」と改称された[28]。

③自分は今「草分け」という語を使ったが、実際それは文字通りの草分けに相違なかった。百万遍知恩寺の門前、吉田神社前の社家町附近には、或いは民家が並んでゐたが、その間は桐畑や麦畑であった。それから南には聖護院御殿の附近熊野神社の附近に一寸町がかった家並があるまで、今の帝大敷地はもとより、三高、一中、医学部、病院のあたり、すべてが茶畑、麦畑で今精神病舎のある鴨川端には牧場があり、そこまで殆ど目を遮る様な建物は一つもなかったのだった。



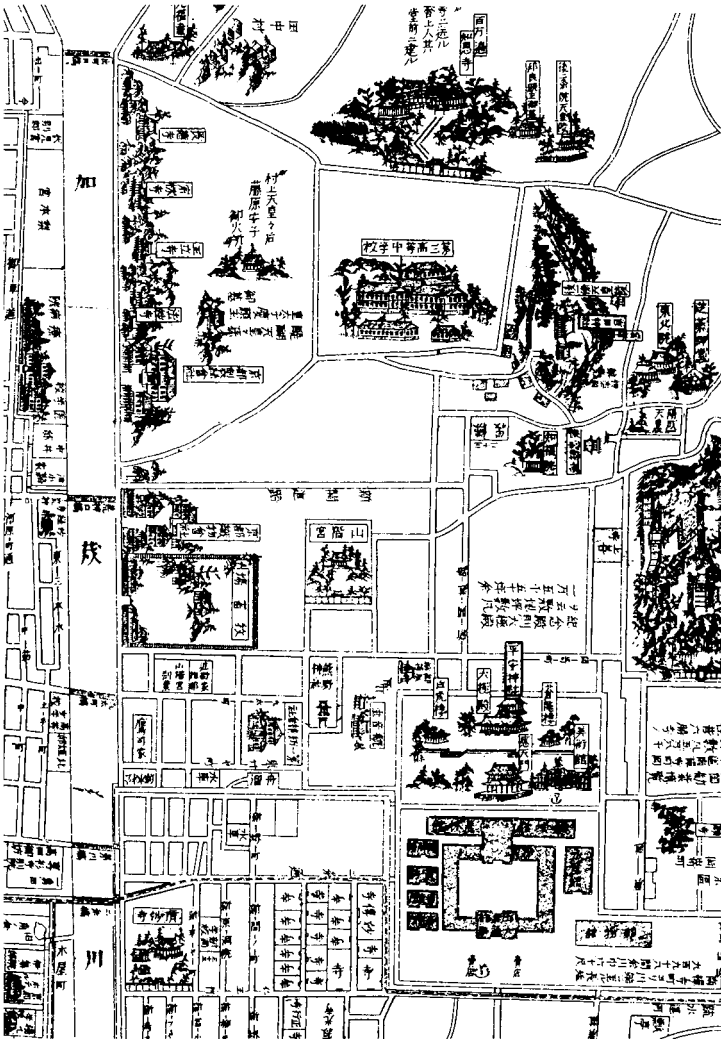
第１図　1892（明治 25）年頃の「鴨東」地域
注）図中の符号に関しては本文参照。
（使用図幅：20, 000 分の 1 仮製地形図「京都」（1892 年））

第 1 図は、1892（明治 25）年の仮製図である。この地図をもとに、同校が京都に移転した後の景観を読み取ることができる。知恩寺の門前では道が東西に通っており、その北側に細長く家並が形成され、西側のそれは鉤型になって北方にも延びている。そのほかに、吉田町、図中に A を付した聖護院とその周辺、B を付した熊野神社とその附近などに集落が形成されている。土地利用で卓越しているのは畑である。喜田の叙述にしたがえば、麦畑、桐畑などがひろがっていたことになる。

第 2 図は、「新撰　京都古今全図」（1895（明治 28）年）中の当該地域である。「第三高等中学校」は道路で他と画された台形状の敷地の中に位置している。第 1 図でそれを確認すると、㋑㋺㋩㋥を頂点とする区画がこれに相当する。頂点㋩には、鴨川にかかる荒神橋の東詰を100メートルほど北上した地点から東北方向へ延びてきた道が辿りつく。その道は、㋑㋺㋩㋥の範囲では姿を消すが、頂点㋑から 100 メートルほど南で再び表れ、知恩寺の門前から続いてきた道と合流して図郭まで到達する。この状況を見ると、㋑㋺㋩㋥の区画ができる前には、この道すなわち白川街道は連続していたことが容易に推定される。

第 2 図で鴨川端をみると、「牧畜場」と記されている。位置的にも第 1 図のCがそれに相当するようである。

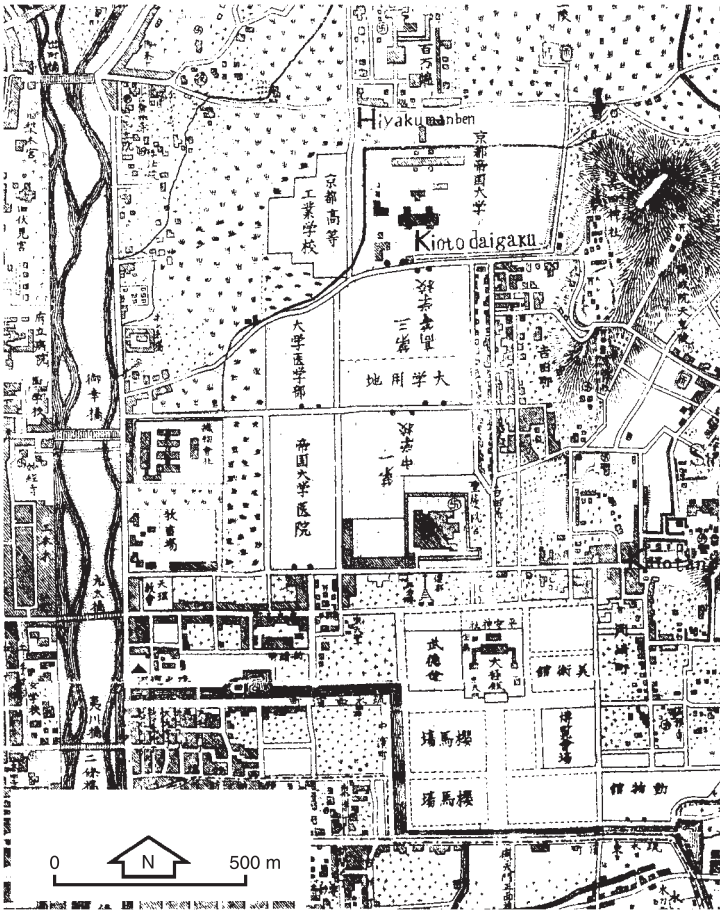
④この<u>広漠たる所</u>へ目をつけたのが当時工業熱勃興の機運にあった際の<u>工業家達</u>であった。荒神橋の東詰には<u>京都織物会社</u>の赤煉瓦の工場が建つ。熊野神社の西南には、今の鐘紡工場の前身たる<u>絹糸紡績会社</u>が、これも赤煉瓦で立派な工場を建



第２図　1895 年頃における第三高等中学校および周辺の施設
（資料：「新撰　京都古今全図」田中文求堂刊、淡彩色刷、1895（明治 28）年）
（出典：『慶長　昭和　京都地図集成　1611（慶長 16）年～ 1940（昭和 15）年』柏書房、1994。）

てる。洛東一帯工業地となつてしまひさうな勢ひであつた所へ、それ等と相拮抗して、第三高等中学校が、それも当時としては素晴らしい赤煉瓦の建物をその北に建築して三方鼎足の勢いをなして居たものだ。(中略)校長はいふまでもなく折田彦一先生で「大きく取っておきさへすれば将来きつと何とか成る」といふ森有礼文部大臣の方針のもとに、当時生徒の数も少く、建物も多からぬこの学校にそんな広大な場所を取って置いたものだと聞いて居る。

第２図では、荒神橋の東詰に京都織物会社が位置している。第１図の黒いＤがその一部かと思われる。喜田がいう、熊野神社の西南にある絹糸紡績会社は第１図のおそらくＥで



第３図　1902（明治 35）年頃の「鴨東」地域
（資料：「京都市實地測量地図」廣岡顕二郎著、松田庄助刊、石版彩色刷・墨刷、1902（明治 35）年）
（出典：第２図と同じ。）

あろう。喜田は言及していないが、第２図の鴨川左岸には「京都製絲会社」が位置している。第１図のＦがおそらくそれであろう。

鴨東の「広漠たる所へ目をつけた」のは、「工業家達」と森有礼文部大臣すなわち政府であった。「大きく取っておきさへすれば」という森有礼の方針で、第１図の㋑㋺㋩㋥の区画が出現したのである。

⑤自分の卒業した明治二十六年が、丁度平安奠都一千一百年に当るので、それを記念すべく岡崎に平安神宮が造営される。大博覧会が開催される。大々的な奠都祭が行はれるといふ大事業が、同時にこの洛東の地に勃発した、いろいろ準備に手間取った為か、実際は千百二年目の明治二十八年にそれが行はれたが、これが機会となって、鴨川以東岡崎、聖護院、吉田あたりが、忽ち面目を一新した。麦畑、茶畑、桐畑や、水田の間を通じて縦横に大道が開通された。人気は急に東へ向いてきた。（中略）この地が今の様な学校街になつたのはこれからだつ

たのだ。その後三中は三高に変り、建物ぐるみ校地を新設の帝大に譲り今の木造建築物となつた。

喜田によれば、都市化の影響を受けだした吉田町、聖護院町、岡崎町あたりが、近郊農村から大きく変化しだしたのは、「平安奠都一千一百年」を記念する大事業が始まってからのことである。平安神宮の造営、大博覧会の開催、奠都祭の挙行などの大事業によって、「麦畑、茶畑、桐畑や、水田の間を通じて縦横に大道が開通された」のであった。農地転用が盛んに行われ、縦横に開通した道路によってさらに都市化の促進が図られたことになる。

第3図は、「京都市實地測量地図」(1902(明治35)年)中の当該地域である。第三高等中学校の本来の敷地には京都帝国大学が位置し、第三高等学校はその南に移転している。大学用地、第一中学校、京都高等工芸学校、大学医学部、帝国大学病院と連続し、その南に、平安神宮、美術館、博覧会場、動物園などが並んでいる。

第3図を見ると、北は百万遍から南は琵琶湖疎水までが極めて整然と区画されている。喜田がいうようにその「草分け」は第三高等中学校であり、「面目を一新した」のは「平安奠都一千一百年」の事業であった。これらは、政府、京都府、京都市によって推進された政策によって形作られた景観である。

V. おわりに

鴨東の近郊農村地域は、明治以降に大きく変化した。喜田が繰り返し言及したように、第三高等中学校がその「草分け」であった。「広漠たる所」に「縦横に大道が開通され」、北は京都帝国大学、第三高等学校が位置する吉田から、南は琵琶湖疎水(第一疎水)までが整備された。

一方、鴨川の西に位置する市街地では、私学が限られた予算と苦闘しつつ、あるいはキリスト教に対する偏見と闘いながら空間を確保した。とはいえ、鴨川の西と東を比較したところで論は展開しない。市街地と近郊農村という地域性の差異は歴然としており、国立と私立の相違も自明だからである。

そうであれば、鴨東の吉田町・岡崎町などと同様に近郊農村的特徴をもち、第三高等中学校が大阪から京都に来る際に、候補地となりながら移転先にはならなかった地域があることに目を向けることにしよう。『神陵史』[29]によると、1886(明治19)年12月16日の時点で、候補地として最有力だったのは、葛野郡等持院村、谷口村などであった。しかし、同年12月27日、森有礼文部大臣によって吉田村[30]に決定した。その決定の事情は詳らかではないらしい。北垣国道京都府知事は、同校の京都への移転を強く働きかけた。1885(明治18)年に琵琶湖疎水の工事を始めた北垣の脳裏には、鴨東地域の将来像が描かれていたのかもしれない。その一環として、吉田村への移転に努力したのかもしれない。筆者はこのことについて判断できる資料を入手できていない[31]。

ただ一点だけいえることは、等持院村は「草分け」になったかもしれない第三高等中学校を得なかったことである。等持院村の人々がこの事態をどう考えたのかに関しても筆者は未調査である。森有礼が候補地から除

外した等持院村が、村外からの影響を受けて顕著な変化をはじめるのは1920年代からである。われわれは、マキノ省三と再び中川小十郎の登場を待たねばならない。これを次稿の課題とさせていただく次第である。

〔付記〕本稿は、2002年度後期・地理学専攻科目「地誌（日本）」で用意した講義ノートの一部分と、その後に収集した資料に基づいている。

注

1）京都府立医科大学は、1872（明治 5）年に創設され、京都の医学教育の中心となった京都療病院を起源としている。1903（明治36）年には府立医学専門学校ができ、大学令による認可を受けて「京都府立医科大学」となった。同大学が位置する上京区梶井町には、「内裏図」（1863（文久3）年）（『京都市史　地図編』京都市役所、1947年、77頁）を見ると、「輪王寺宮　御里坊」が位置し、その南には「正親町殿」とある。したがって、京都府立医科大学の敷地も、禁裏御所の近傍における土地所有と土地利用の変動のなかに位置づけることが可能かもしれない。

京都府師範学校は、1876（明治 9）年に「京都御苑内」で創立されてから、「旧会津屋敷」、「上京区松蔭町」（寺町通荒神口）」などを経て、1899（明治 32）年に「愛宕郡上賀茂村字小山」に移転した（京都府師範学校編『京都府師範学校沿革史』1938、第一書房、1982 復刻）。この事例も本稿のテーマと深く関わると思われる。しかし、紙幅の都合上、本稿では国立と私立に限定し、公立に関しては事後の課題とする。

2）龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史　通史編　上巻』龍谷大学、2000、627頁。

3）竹原文叢堂梓　慶応4年戌辰二月再刻　竹原好兵衛版木版彩色刷。

『慶長　昭和　京都地図集成　1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』柏書房、1994。

4）『龍谷大学　三五〇年の歩み』龍谷大学、1989、34～35頁。

なお、「25　京都の大学」京都市歴史資料館、2004には、西本願寺大教校が龍谷大学の前身だと記載している。

5）前掲4）50頁。

6）大谷大学百年史編集委員会『大谷大学百年史〈通史編〉』大谷大学、2001、251頁。

7）ここには高倉会館、真宗大谷派高倉幼稚園などが位置している。このことは、大谷大学企画室　長野美穂氏に教えていただいた。記して謝意を表する次第である。

8）前掲3）20-A、陸地測量部発行、1915、縮尺10,000分の1。

9）前掲4）93頁。

10）前掲4）71頁。

11）上野直蔵編『同志社百年史』学校法人同志社、1979、80～81頁。

本稿の主テーマではないが、新島襄の居住地に関して次のようなことが考えられる。前掲10）86 頁には、「山本から譲りうけた相国寺門前の土地にさっそく校舎の建築にとりかかることは新島にはまだできなかった。一つにはアメリカン・ボード宣教師団の最終的な同意を必要としたことがある。今一つの問題は、京都にヤソ教の学校ができるということを耳にした仏教の僧侶たちが、反対運動の火の手をあげ、府庁に陳情をはじめたことである。

新島は、そういうわけで、当分の間の仮校舎兼寄宿舎として、寺町通丸太町上ル（松蔭町一八番地）にあった華族高松保実の邸宅を借りることにした。」とある。

寺町丸太町上ルには、学校法人同志社が一般公開している、京都市指定有形文化財の「新島襄旧邸」が位置している。そこで配布しているパンフレット（2003年11月5日入手）によると、この旧邸の位置するところにあった高松保実邸で、新島襄は1875（明治8）年に同志社英学校を開業し、1878（明治11）年にその居宅を買い取った。

「新島旧邸」の位置には、「内裏之図」（1709（宝永6）年）（『京都市史　地図編』京都市役所、1947、76頁）では「中井主水」、「禁闕内外全図」（1837（天保8）年）（同上、77頁）では「御大工　中井岡次郎」と記載されている。したがって、「新島旧邸」すなわち「高松保実の邸宅」には、かつて五畿内近江の6ヵ国の大工を支配した（図録『大工頭中井家の絵図』京都市歴史資料館、1999）中井家の屋敷が位置していたようである。ただし、「内裏図」（1863（文久 3）年『京都市史　地図編』京都市役所、1947、77頁）では、「御大工　中井」と記載されている箇所は、南に若干移っている。したがって、1837～1863年の間に何らかの変化があったようにも解される。

中井家から直接に高松保実の所有地となったのか否かはわからないが、御大工の中井家がそこから転居したことは事実である。したがって、明確には示せないものの、明治初頭におけ

る御所近傍の土地所有が流動化したことが、新島による購入を比較的容易にしたように推察される。より詳細な検討は、後日の課題とさせていただく。

12）前掲 10）88 頁。

13）『京都市史　地図編』京都市役所、1947、77 頁。

14）前掲 10）196 頁。

15）前掲 10）201 頁。

16）今出川烏丸東入ル北側には、瓦葺の門が現存し、「同志社大学大学院」の表札が掲げられている。この門もかつての公家屋敷のものかと思われる。

17）立命館五十年史編纂委員会『立命館創立五十年史』（奥付には『立命館五十年史』と書かれている。）立命館大学五十周年記念事業局、1953、39 頁、19 頁。

18）立命館百年史編纂委員会編『立命館百年史通史 1』学校法人立命館、1999、112 頁。

19）前掲 16）51 頁。

20）前掲 17）114 頁。

21）「京都市歴史資料館テーマ展　京のかたちⅣ　近世の京都」（平成 17 年 9 月 2 日～ 11 月 27 日）の展示で観覧した（2005 年 9 月 13 日）。

22）前掲 20）に同じ。

23）前掲 20）に同じ。

24）京都大学百年史編集委員会『京都大学百年史資料編 1』京都大学後援会、1999、3 頁。

25）永原慶二監修『岩波　日本史辞典』岩波書店、1999、294 頁。

26）岩井武俊編『京ところどころ』金尾文淵堂、1928、190 ～ 198 頁。

27）神陵史編集委員会『神陵史―第三高等学校八十年史―』三高同窓会、1980、263 頁、267 頁。

28）『写真図説　紅萌ゆる丘の花　第三高等学校 80 年史』講談社、1973、35 頁。

29）前掲 26）252 頁。

30）近世から明治 21 年までは「吉田村」であった。『角川日本地名大辞典 26　京都府　上巻』角川書店、1982、1471 頁。

31）『慶長　昭和　京都地図集成　1611（慶長 16）年～ 1940（昭和 15）年』柏書房、1994、に収録された「改正　京町御絵図細見大成」（1868（慶応）4 年）を見ると、百万遍（知恩寺）の東側と南側にそれぞれ「土州屋敷」と「尾張屋敷」、熊野神社の周辺に「彦根屋敷」、「越前屋敷」、「阿州屋敷」、頂妙寺の東方に「加州屋敷」などが位置している。「改正　京町絵図細見大成」（1831（天保 2）年）にはそれらの屋敷は記載されていない。したがって、おそらく 19 世紀の半ばころにこれらは建てられたものかと思われる。位置的には、第三高等中学校は「尾張屋敷」跡地に近いように見える。屋敷が廃絶し、農地化したところで建築が進められたのか、あるいは更地に建築されたのか、判断できる資料を入手できていない。農地の潰廃を必要としたか否かは第三高等中学校の誘致に関わることであったかもしれないが、今のところ推定の域を出ない。薩摩藩屋敷跡に立地した同志社英学校の例も勘案しつつ、検討していきたい。